

## *The Quiet American* について

—恣意的な論理—

植木 利彦

倉敷芸術科学大学国際教養学部

(2000年9月30日 受理)

### 序

*The Quiet American*<sup>1)</sup>は、西洋先進諸国が18世紀から20世紀初頭にかけて植民地化してきた地域で20世紀後半に入り独立自尊を求める闘争が激しくなりだした時代の物語である。ベトナムにおいても19世紀の半ばから続いたフランスの支配から独立を勝ちとる闘争がベトナムとフランス軍の間で行われていた。フランスが劣勢になり、ベトナムから撤退する寸前であったが、アメリカが当時の中共やソヴィエトの支援を受けた共産勢力の南下を防ぐという目的でベトナムに介入しようとしている時期である。そのようなベトナムのサイゴンでベトナム娘のフォングを巡って繰り広げられるイギリスのジャーナリストであるファウラーとアメリカ経済使節団の一員であるパイルとのたわいもない三角関係の話であるが、フォングが他国に翻弄されるベトナムを、ファウラーが旧植民地主義帝国の一員であるイギリスを、パイルが現代世界において世界の覇権を目差すアメリカを象徴する人物として描かれている。この小論では、各人の生き方を通してそれぞれの国の民族性を検証しながら、グリーン的主張を探ってみたい。

### パイル

ハーバード出身のアメリカ人の若者、パイルは、表向きは経済使節団の一員ということになっているが、実際はヴェトナムを植民地として支配していたフランスとそのフランスを相手に戦っている共産勢力に支援されたベトナムとに取って代わる新しいヴェトナム人による第3勢力を築くために暗躍しているアメリカの秘密工作員なのである。彼はヴェトナムの現実をよく理解していないヨーク・ハーディングという人物の書物を読んでその理論に陶醉し、その理論を実行することによって、ベトナムを目下の窮状から救い、自由主義社会を共産主義の影響から守るアメリカの役割の一端を担おうとする人物なのである。ヨーク・ハーディングの意図するところは善意に満ちあふれた博愛精神的なものであるが、彼の理念の哲学、概念的思考は現実を全く考慮に入れず机上で考え出した単なる抽象的な幻に過ぎない。そのヨーク・ハーディングの現実を無視した虚しい空論を実行しようとするパイルの善意と熱意、そして現実を目の当たりにしながら実状を理解しようとしな

い愚かさが悲劇を引き起こす原因であることに彼は全く気づいていない。彼にとって大切なのはヨーク・ハーディングの理論を実行し、アメリカに貢献することであって、その過程において特に関心のないベトナムの市井の人々が犠牲となることなど問題ではない。民衆の中から、いかなる外国にも支援されない自国の独立を求める国民的熱意の高まりによって第3勢力が生み出されるのであればまだしも、民衆やベトナム軍に爆弾テロという謀略を繰り返す主義も信念も持たない単なる武装集団を第3勢力に育て上げようというパイルの試みはヨーク・ハーディングの理論に合う形態を作り出しさえすれば、諸々の状況が交錯する現実の社会の中ですべてが上手くいくかのように考える単純さを示す以外の何物でもない。

そうしたパイルの行動を Kulshletha は “Good intentions are apt to be debased and misdirected by lack of experience: they do not avail where the understanding is dim.”<sup>2)</sup>と述べ、Atkins は “the innocence and goodness are of the wrong kind, they are childlike qualities in an adult mind.”<sup>3)</sup>と述べている。それはパイルの人生経験を積んでいない若さともいえるが、同時に20世紀に入って急激に台頭し、世界のあらゆる問題に世界の警察として自らの持論を押しつけ、それを正義と主張するアメリカ的態度と共通するものである。本多勝一氏はその著『殺される側の論理』のなかで、当時のそしてその後のアメリカのベトナムにおける行動に対し、「他国の内政に平然と干渉することが、アメリカの国家権力の常識となっていることは、世界のこれまた常識ですが、それがアメリカ人個人個人の体質にまで及んでいることは、私たちにとって大変不幸なことです。」<sup>4)</sup>と述べている。パイルはまさにこのアメリカを象徴する人物である。このような何事にも干渉したがる態度は、ファウラーとフォングの関係にパイルが割り込んでくることにも見られる。確かにファウラーとフォングは結婚していないので、パイルがフォングに結婚を申し込むことは違法ではないが、友人として或いは道義的な立場からすれば、いくらフェアに振る舞っても余計なお世話ということになる。パイルのフォングを譲れという主張はアメリカがベトナムを救おうとすることを暗示するものであるが、それはファウラーとフォングのそれまでの関係を無視した彼の一方的な考えである。Miller はファウラーとフォングのそれまでの関係をそしてファウラーとパイルの友人関係をも壊しかねないパイルのわがままの行為を “His puppyish desire to “protect” Phong is as dangerous to her as is the American desire to rescue Vietnam for the forces of communism.”<sup>5)</sup>と述べている。若さと財力を所持しフォングをファウラーから奪い取ることもフォングのことを考えれば当然のこととするパイルには、力と財力が正義とする現在のアメリカの姿が投影されていて、自分だけが正しいという現在のアメリカ的意識がはっきりと出ている。それはまさに「一般的アメリカ人でいつも問題なのは、この「善意」というものなのです。一方的善意。独善。「意味する者」の論理による「意味される者」への押しつけ……。」<sup>6)</sup>といえる。しかもその善意は結果の評価によっては悪とも判断されるものなのである。

パイルはベトナムでの戦争に対して “You have to fight for liberty” (p. 102) というが、ベトミンも自由を獲得するために戦っていることを彼は忘れていない。だから彼の正義は押しつけで、ベトナム国民が望んでいるものではない。それに対してファウラーは “Do you think they know they are fighting for Democracy? We ought to have York Harding here to explain it to them.” (p. 98) 或いは “They want enough rice. They don’t want to be shot at. They want one day to be much the same as another. They don’t want our white skins around telling them what they want.” (p. 100) という。ファウラーはパイルのやっていること、語っていることが如何に現実離れしているかを認識させようと努力している。ファウラーの忠告はその後のアメリカがベトナムで行った行動にたいするグリーンズの警告であったと思われる。明らかにファウラーの目にはアメリカが勝手に自由主義を守るなどと馬鹿げたことをうそぶいているにすぎない。彼に言わせれば、アメリカが乗り込んできて事態を非常に複雑、且つ危険なものにしているのである。そしてその動機は「アメリカは、自分自身の権益の擁護というよりは、覇権国家が負うべき政治的・軍事的な負担として、ベトナム—インドシナへの介入という道を選んだのであった。」<sup>7)</sup> という身勝手な理由以外にはないのである。

パイルのファウラーの忠告に耳を傾けない様子はまさに若者の思い上がりの態度であり、それはとりもなおさず世界の外交関係におけるアメリカのひとりよがりにつながる。パイルはベトナム人の幸福を真剣に考えているのではなく、アメリカが東洋で何をしなくてはならないかという義務感に駆られて行動している。パイルのこのような独善的な行動を Miller は “His loyalty to Indochina consists of nothing more than mere American self-interest, unimaginative and banal”<sup>8)</sup> と述べている。彼は計画した行為の失敗や多数の死者を出した不幸の原因は、偶発的な計画の変更や手違いにあり、死傷者達は自由と民主主義を確立するための名誉ある犠牲者あるいは戦死者と平然と言っている。このことから理解できるようにパイルは常に全てのことを自分の都合のいいように解釈する特質をもっている。パイルの異常さは、自分の信念を満足させるためには、またアメリカの自由主義とアジアでの覇権を守るためにはベトナム人はいくら殺傷してもかまわないとする無知さ加減にある。それはまさに他を省みることのないナルシスティックなエゴイズム以外の何物でもない。

## ファウラー

ベトナムでの闘争は、英国人であるファウラーには関係のない、フランス軍とベトミン、そしてその闘争に割り込もうとしているアメリカの問題として傍観しているが、基本的には、民族や国家を越えた人間の生存の権利を主張する側とそれを侵す側との闘争である。それを傍観していることを、行動を起こさないことを理知的で、俗事に惑わされない態度でもあるかのようにファウラーは装っている。それは彼の過去の生活から学んだ知恵——妻との個人的な関係から、人間は他人と関わり合いになるとお互いに傷つけ合い苦し

めるという彼の過去の経験から得られた知識——であろう。ヘレンとの確執、アンとのしがらみは、西洋的な意味での愛の感情や観念が当事者を互いに拘束し所有しようとするベクトルを発揮し、それが互いを傷つけ合うことをファウラーに教えた。しかし、一見、相手を所有しようとする利己的に見える彼らの関係の根底には、ヘレンの苦しみを理解しているように、相手を思いやる人間的な感情が常に存在している。そして相手を傷つけることに対して、また傷つけられることに対しても心の痛みを覚えている。愛し合う者が互いに相手を占有し、占有されることを良しとする考えは合理的な西洋世界が人間に課した科刑のように思える。ファウラーがベトナムに滞在しようとするのは、そのような西洋的な意味での愛の感情や観念に拘束されることを嫌ったからである。

‘Love’s a Western word,’ I said. ‘We use it for sentimental reasons or to cover up an obsession with one woman. These people don’t suffer from obsessions. You’re going to be hurt, Pyle, if you aren’t careful.’ (pp. 147–8)

一元的な観念に縛られることのない自由な生活をしているファウラーの目にはヨーク・ハーディングの理論に取り憑かれているパイルは若者らしく、かつ幼稚に映るのだろう。ファウラーのパイルをからかう態度は、人生の経験未熟な若者が見ず知らずの国で我が物顔に振る舞う態度への嫌悪感というよりは、彼の経験から、軽率に行動することは問題の種を蒔くことになると揶揄しているのだろう。スコウビーほど正義臭くなく、それでいて第三者的なシニカルな態度は、単純なアメリカを象徴するパイルをからかう経験豊かな大人のイギリスを象徴しているようである。反面、自分の属する社会と積極的に関わろうとしないことは、自分さえ無事でありさえすれば他のことはどうでもいいとする利己的な態度と非難されても仕方がない。それでも経験的に行動すると誤りを犯すことを知っているファウラーは、Conradの作品 *Victory* の Heyst と同じように社会と積極的に関わろうとしない態度をとる。ファウラーと Heyst のこの共通した非社会的な態度をとりつづける原因と結果について Kalshletha は次のように述べている。

Both believe, Heyst on account of his early training and Fowler on account of the disappointing nature of life, that action of any sort tends to accentuate the evil of life and that non-participation and impersonal observation of the spectacle of life should be the extent of one’s mode of existence. This withdrawal impulse brings about a paralysis of will, an indecisiveness, which prevents action.<sup>9)</sup>

ファウラーやパイルは彼らの意思次第でその環境から *dégagé* することも、積極的に *engagé* することもできるが、ベトナムの人々はその置かれた環境から逃れる術はない。ベトナムという他国で西洋世界の植民地主義帝国がこの戦争をしているのであって、強国が弱国を支配し続けようとする戦争なのだ。フランス軍の将校は戦闘の状況説明をしている

が、職業軍人は別にして、犠牲者はフランスの若者ではなく外人部隊の傭兵であり、ベトナムの人々である。更にフランスの撤退後にその戦争に割り込もうとするアメリカの思惑で罪もない市井の人々がベトミンの仕業に見せかけたパイルが裏で糸を引くThéの一味によるテロ行為によって次々と傷つき殺されていく。パイルの理論や行動が笑い話で済まされるたわいもないものであれば問題ないが、彼の愚行によって罪もないベトナムの人々が次から次へと犠牲になるとき、それは笑い事で済まされることではない。犠牲となる人々を目の当たりにしたとき、英国人であるファウラーは *dégagé* 的態度をとり続けることもできるであろうが、同じ世界に住む他のものの不幸や難儀に心を閉ざすことは人間としての責任の放棄を弁護する詭弁的態度に過ぎない。トルウアン大尉は西洋世界を代表している人物であるかのようにファウラーにいう。“We are fighting all of your wars, but you leave us the guilt.” (p. 169)

彼が直接取材したものではない新聞記事に見る戦争犠牲者となった死傷者の数は彼の感性に訴えるものではないが、彼が取材に出かけた現場での状況は彼の視界を通して感性に訴えてくる。ファウラーは事あるごとに前線でフランス軍に狙撃され、溝の中に横たわる母親と子供の姿、ファウラーとパイルが立ち寄ったため逃げ遅れた見張り塔の若い兵士の臨終の姿、広場で繰り広げられたテロ活動により、死んだ子を胸に抱き、その醜い姿をさらさないように貝笠を子供に被せる母親の姿を思い出す。その光景が彼の感性を激しく揺さぶり、憐憫を覚えずにはいられない。ファウラーはいう、“I cannot be at ease (and to be at ease is my chief wish) if someone else is in pain, visible or audibly or tactually.” (p. 124) 哀れな犠牲者に憐憫を感じずる能力がファウラーを人間らしくしている。つまり、彼は本来、潜在的な道義感を持っているといえる。このようなファウラーの反応がその後のパイルの抹殺を決意させる行動の原動力になっていることについて Kulshletha は次のように述べている。“Yet the admission that his peace depends upon the peace of others implies his participation in the human situation.”<sup>10)</sup> 一方、パイルはフォングに対しては中世の騎士のようなヒューマニスティックな態度で接しながら、同じベトナム人である犠牲となる見知らぬ人々に対してはまるで人間ではなくてものものであるかのように “They are only war casualties. It was a pity, but you can't always hit your target. Anyway they died in the right cause....In a way you could say they died for democracy.” (p. 200) という。この非人間的、かつ利己的な態度にファウラーの怒りが爆発したのだ。トルウアン大尉がいうように、“It's not a matter of reason or justice. We all get involved in a moment of emotion and then we cannot get out. War and Love - they have always been compared.” (p. 170) 即ち、事に関わることは感情的な問題であっても、まともな人間である限り、傍観者の立場を堅持することは不可能なのである。

As an ordinary, nonpolitical, moderately selfish, but intelligent human being he is moved to act against violence and stupidity; and that he is impelled towards such action

above all by his insight into human suffering, especially the suffering caused by war and political conflict.<sup>11)</sup>

広場での不幸な犠牲者の光景を目の当たりにしても全く何の反省の色も見せないパイルを生かしておくことはテロ行為によって今後も多くのベトナム人が死ぬことを意味する。この不幸を避けるためには、人間でありたいのなら、ファウラー自身が社会と積極的に関わり (*engagé*)、社会の構成員としての責任を果たすために、どちらかの側につかなくてはならない。従ってパイルを葬り去るための “The choice for Fowler is between two evils and he chooses what he thinks is the lesser of the two.”<sup>12)</sup> いずれにせよ、社会の責任ある構成員であるためにも、不幸な光景に耐え難い自分自身を救うためにも、ファウラーは自分の決断によってパイルの愚行に終止符を打たなくてはならない。たとえその結果が、 “For Fowler, enacting his *Juda's* role, there is guilt and a happiness stained with remorse”<sup>13)</sup> ということであっても……。

### フォング

本来、他人同士が家庭や社会で共同生活を営むことは、信頼、協力、依存、愛情といった諸々の基本的な条件が根底にあって成立するものである。将来の生活をかなりの確率で予測できる平和な社会では、社会的基盤を維持し社会の安定を図るために法律や社会通念、宗教や倫理観などでその構成員の自由奔放な活動を制度の面からまた精神的な面から制約を課している。しかしそれらの条件が社会的、政治的、あるいは物理的な何らかの事情によって変化したり無くなったとき、家庭や共同体、結婚状態も変化し、時には崩壊するのが自然であり当然のことである。その意味では戦渦に明け暮れる政情不安な状態にあるベトナムでは、そうした安定した社会の規範は通用しない。すべての人間がその日その日を生きるためにその時にできる最善を尽くし、少しでも確率の高い可能性に全てを賭けて生き抜いているのである。より高い可能性が水泡に帰したとき、残された次の可能性を頼る以外、ベトナムの人たちには生き残る方法はない。従って、姉と二人っきりのフォングも生きるため、生活の安定を得るために彼女なりの精一杯の努力を払って置かれた環境の中でごく自然体で彼女の生活を構築してきたといえる。彼女は現実と苦痛とに直面しながら、今という時代を生きていることを素直に受け入れており、他人に理解されたい、相手を理解したいというような贅沢は言わない。 “she'll never suffer like we do from thoughts, obsession.” (p. 149) 彼女はまるで水のように柔軟な女性で、ベトナム人は、「人生を暗く思い詰めることなく、肩ひじも張らず、風に揺れる柳のように、自然体でしなやかに人生を生きてゆく。」<sup>14)</sup> というヴェトナムの人々に共通する特質を備えている。彼女の何事があっても声を荒立てたり、感情を爆発させたりせずに無言で耐えている生活態度、「原則に縛られるのではなく、現実の方を重視して自分の方をそれに合わせると共に、常にもの

ごとを情に流されず、立て分けて考える』<sup>15)</sup>姿勢はヴェトナム人を象徴する人物といえる。そんな彼女をファウラーは、“One always spoke of her like that in the third person as though she were not there. Sometimes she seemed invisible like peace.” (p.42) という。だからファウラーの庇護に対してフォングは愛で応えているが、彼らの関係には相手を拘束したり、所有しようという西洋的な意識はない。また、ファウラーよりパイルの方が将来の長期に渡る安定した豊かな生活を彼女に提供できそうであると読みとり、彼女がパイルのもとに移るのもこれまた自然なことである。そしてパイルが亡くなったとき、彼女が再び、ファウラーのもとに帰ってくるのも、水が高いところから低いところへ流れていくように自然なことなのである。我々はフォングがパイルやファウラーについて彼女の個人的な意見や感情を全く表明しないことに不自然さを感じるかもしれないが、あのような政情不安な国にいれば、彼女にとって大事なことはどんな形であれ、安定した生活であり、将来の保証であって、理解でもなければ愛情でもない。その点を考えれば、彼女が生き延びれる可能性を求めて自然の摂理に従って行動するのは当然である。ファウラーは彼女のそうしたたかな生き方を次のように表現している。“She is no child. She’s tougher than you’ll ever be. Do you know the kind of polish that doesn’t take scratches? That’s Pouong.” (p.148) 彼女のこうした一見無節操、非道徳的とも見える生活態度は、チョウ氏の家庭と仕事場とが同一場所にあって親戚の者やがらくたが入り交じり散乱しながら無秩序の中に一定の秩序を保って生活を維持している如く、置かれた環境の全てを受け入れながら、そのときの最善の選択に身を任せた現実的な生き方といえる。我々は、フォングのように実に自然に生きている人と人工的な戒律や社会的な慣習に縛られて個人的な感情の自由な発露を抑制し何事も理性的、規範的に対処しようとする英国にいるファウラーの奥さんとは実に対照的であることに気が付く。ここに合理主義的、一元的な西洋と宇宙的、多元的な東洋との人生に対する考え方、捉え方の対比を見る思いである。

## 結論

ベトナムの人々はフランスやイギリスの支配を長い年月に渡って経験しているが、彼らは決して人間として、民族としての自由と独立を諦めているわけではない。先進諸国の人間は武力を用いながら、支配後はキリスト教や社会的な思弁哲学や実証的科学法則をもとに彼ら西洋の一元的な原理の正当性を主張し、彼らの保護と統治が後進地域に進歩と安定をもたらすかのように主張する。そして混沌をそのまま包括する多元的な世界の存在を見下す。すなわち西洋の先進性と人間の理性にたいする絶対の信頼がそこに存在している。政治的にも、経済的にも、軍事的にも、社会的、文化的にも一元性の原理を担う欧米社会が19世紀後半から今日まで世界を席卷してきたことは確かである。

だが東洋では、*The Quiet American*に見られるキリスト教、仏教、儒教を総合したようなベトナムのカオダイ教のように、現実にあるすべてのものを混沌とした状態のままで受

け入れている。このあらゆるものを混合しあらゆるものを結合していく柔軟性がアジアの特色といえる。この多様性の原理を基盤とするアジアは、政治的にも、経済的にも、軍事的にも西洋列強の支配下に置かれてきたが、そのことがアジアが西洋に劣る弱い存在になるのだろうか？少なくとも西洋社会はそのように考えているようである。そうした先進諸国の考えがベトナム人を見下したような態度や言葉に現れている。例えば、グレンジャーは輪タクの車夫に料金の5倍の金を街路に投げて拾わせる。経済アタッシュェのジョーは自分のフランス語を聞き取れないベトナム人に向かって‘I was three years in Paris. My accent’s good enough for one of these darned Vietnamese.’ (p. 25) という。こうした態度はパイルの言葉の端々にも見受けられる。それは人間の尊厳を傷つけるものである。本来彼らはファウラーが言うように“‘We’ve no business here. It’s their country.’” (p. 115) なのである。

しかし、アジア人の、ベトナム人の強さは運河の近くでフランス軍に狙撃されて亡くなった母親と食べ物らしきものを握りしめ胎児のような姿勢で死んでいる赤子に見られる。非戦闘員である彼らは兵士が去るまでひたすら息を殺して溝に身を潜めていたのだ。その結果が狙撃されるということになるのだが、ベトナムのあらゆる地域で何千、何万という女、子供がそのような危機に息を潜めて耐え、生き延びてきた。同じことが広場での自転車爆弾テロにも見られる。手足の無くなった男、殺された子供に貝笠を被せて子供の醜い姿を隠して無言のまま抱きしめている母親。

It was like a church I had once visited during Mass – the only sounds came from those who served, except where here and there the Europeans wept and implored and fell silent again as though shamed by the modesty, patience and propriety of the East.” (p. 182)

彼らは苦痛の叫び声、怒りの声、嘆きの声をあげず、ひたすら耐えている。彼らの姿には理由付けすることのできない必然によって、この世に投げ出された自己の存在に対して何ら不満を述べることなく、すべてを受け入れ、責任を果たしているようにさえ思える。その忍耐強い生命力が次々と支配する国が代わっても絶えず、生き続け、自由を勝ち取るために地道に戦い続ける原動力となっている。即ち、彼らの強さは思惟的な観念に依存するのではなく、本能に根ざした生命力にある。ファウラーは新たにベトナムに介入しようとしているアメリカの姿勢に対してその無意味さとベトナム人の強さを次のようにパイルに言って聞かせる。

‘I know that record. Siam goes. Malaya goes. Indonesia goes. What does “go” mean? If I believed in your God and another life, I’d bet my future harp against your golden crown that in five hundred years there may be no New York or London, but they’ll be growing paddy in these fields, they’ll be carrying their produce to market on long poles wearing their pointed hats. The small boys will be sitting on the buffaloes. I like the



buffaloes, they don't like our smell, the smell of Europeans. And remember – from a buffalo's point of view you are a European too.' (p. 100)

無力な人々は殺されるままになっているのではない。不条理な死を与えられた者の怒りは、個人的には何の實りももたらさないが、その怒りが日々の糧として個人個人の胸の奥深くで燃え続け、そうした個人の怒りが結合したとき、それは歴史を動かす力となることは明白である。彼らの怒りの結晶がベトナムという組織を作り、遅い足取りではあるが一步また一步と独立へ向かって歩みだしているのである。彼らは Atkins がいうように民族主義者であって、共産主義者ではない。“The movement was a nationalist one and only Western clumsiness was compelling it to become Communist.”<sup>16)</sup> 彼らを共産主義者と手を結ばせているのはアメリカがフランス軍に援助を与えたり、自由世界を共産主義から守ることを錦の御旗に自ら介入しベトナムの侵攻を押さえようと計画することにある。パイルはその先鋒であるが、彼はベトナム人の人命を奪うフランス軍と何ら変わりはない。しかも自分が悪いことをしているという反省もない。そうした殺人者に対するファウラーの怒りと同じ怒りをベトナム戦争を取材した本多勝一氏は次のように述べている。

<sup>インセント</sup>  
無知な個人に対しては、当人は「善意」のつもりでいることが多いのですから、怒りのぶつけようがないのです。ぶつけるべきは、その背後に潜むものとしての構造、社会の成立の構造なのでしょう。しかし、その無知な個人がアジアの一角に機関銃や爆弾を持って上陸してくるとき、もはや「される側」は、無知だからといって「寛容」になったり、傍観してはおられなくなります。虐殺されながら「寛容」になれるか。当の殺される者に残された道は、戦いしかなくなるのです。<sup>17)</sup>

アメリカを初め先進諸国は民主主義だの自由主義だのというが、真にベトナム人を人間として扱っているのは共産主義者なのだということをファウラーは次のように指摘している。

'...., but who cared about the individuality of the man in the paddy field – and who does now? The only man to treat him as a man is the political commissar. He'll sit in his hut and ask his name and listen to his complaints; he'll give up an hour a day to teaching him – it doesn't matter what, he's being treated like a man, like someone of value. Don't go on in the East with that parrot cry about a threat to the individual soul. Here you'd find yourself on the wrong side – it's they who stand for the individual and we just stand for Private 23987, unit in the global strategy.' (p. 103)

西洋の先進諸国は東南アジアの人間の尊厳に重きを置いているのではなく、東南アジア

を彼らの政治的、経済的支配下に置き、西洋の利権を守る地域と見なしているに過ぎない。

The outstanding fact about the situation in Indo-China was that never before had the anonymous peasant been treated as an individual. West talks glibly about individual rights, and thinks of and acts towards the Eastern peasantry as if it were a vast, undifferentiated mass.<sup>18)</sup>

従って、全ての元凶は他国を支配下に置こうとする植民地主義的な妄想にある。我々は常に人間の尊厳を、民族の自立を重視すべきであって、政治や経済、軍事面を重視した観点に立ってものごとを遂行することはその出発点から誤った道に踏み出すものとグリーンはいつているように思われる。

He (Greene) had the sense to see that only independence could save Vietnam. Despite his admiration of French culture and his hatred of Communism, he knew that the latter must be fought by the people themselves. He did not make the mistake of political innocents in believing that guns can defeat Communism, especially foreign guns.<sup>19)</sup>

軍事力、経済力でもってある地域や国民を支配することはできても彼らの心や精神まで支配することはできない。各々の国にはその国の独自性があるのであって、他国の理念や体制を強要することは無理なことなのである。個人同士であっても Greene が言うように

“Wouldn't we all do better not trying to understand, accepting the fact that no human being will ever understand another, not a wife a husband, a lover a mistress, nor a parent a child? Perhaps that's why men have invented God - a being capable of understanding” (p. 66-67) ということなのかもしれない。たとえそれが事実であったとしても、逆に我々は、相手を、他国を理解するように努めることが、相手の立場に立った温かい思いやりがこの世界に必要なのだということ認識しなくてはならない。

#### Notes

- 1) Graham Greene, *The Quiet American* (London: William Heinemann & The Bodley Head, 1983), 以後同書からの引用は本文中に頁数のみを表示
- 2) J. P. Kulshrestha, *Graham Green, the novelist* (Delhi: Macmillan India Limited, 1977) p. 154
- 3) John Atkins, *Graham Greene* (London: Calder and Boyars, 1966), p. 232
- 4) 本多勝一, 『殺される側の論理』(東京: 朝日新聞社, 昭和48年), p. 100
- 5) R. E. Miller, *Understanding Graham Greene* (Columbia: University of South Carolina, 1990), p. 110
- 6) 本多勝一, p. 90
- 7) 古田元夫『ベトナムの世界史』(東京: 東京大学出版会, 1996年), p. 150
- 8) R. E. Miller, p. 109
- 9) J. P. Kulshrestha, p. 147

- 10) J. P. Kulshrestha, p. 150
- 11) Miriam Allott, "The Moral Situation in *The Quiet American*" in *Graham Greene, Some Critical Considerations* ed., by Robert O. Evans, Lexington ; University of Kentucky Press, 1967), p. 205
- 12) J. P. Kulshrestha, p. 158
- 13) Miriam Allott, p. 199
- 14) 皆川一夫, 『ベトナムのこころ』しなやかさとしたたかさの秘密 (東京: めこん, 1997年), p. 5
- 15) 皆川一夫, p. 45
- 16) John Atkins, p. 228
- 17) 本多勝一, p. 140
- 18) John Atkins, p. 228
- 19) John Atkins, p. 227 (Greene) は筆者挿入

On *The Quiet American*  
— An Arbitrary Logic —

Toshihiko UEKI

*Faculty of Liberal Arts and Science for International Studies,*

*Kurashiki University of Science and the Arts,*

*2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan*

(Received September 30, 2000)

*The Quiet American* is the novel of the times when the independent and self-respect movement and conflict were becoming fiercely in the area where the advanced Western countries had colonized from 18th century till the first half of 20th century. In Vietnam, people led by Ho Chi Minh had been fighting against France which had dominated her since the middle of 19th century. The French Army were becoming inferior in strength and planning to withdraw from Vietnam, but in these days America taking the place of France was intervening in the conflict to prevent the invasion of the Vietminh supported by the People's Republic of China and the Union of Soviet Socialist Republic to South Vietnam.

At first sight the novel seems to be a trifle triangular love story in which English journalist, Fowler, and one of the members of American Economic Aid Mission, Pyle, are rival each other in love for a Vietnamese girl, Phuong, living with her sister in Saigon at that time. But each of them, Phuong, Fowler and Pyle, seems to be described as a representative of his or her country and nation. That is, Phuong represents Vietnam (and Vietnamese) which had been poked fun at by the advanced Western countries, Fowler represents England (and English) which was one of the old colonialistic imperialism countries such as Spain and France, and Pyle represents America (and American) which was struggling for economical and political supremacy in the world.

In this paper we want to inspect the character of each nation through their way of life and also survey Greene's intention.